

児童の育ち

児童の育ちについては、2つの調査を行った。回答総数243

【教育効果】

1つ目は、「基本的な生活習慣」「自己肯定感」「仲間とのコミュニケーション・絆」に関する意識の変容を調査するため、独自の調査項目を設定した。各カテゴリには、5つずつの質問項目を用意し、4件法にて回答させた。

4とてもあてはまる 3ややあてはまる
2ややあてはまらない 1全くあてはまらない

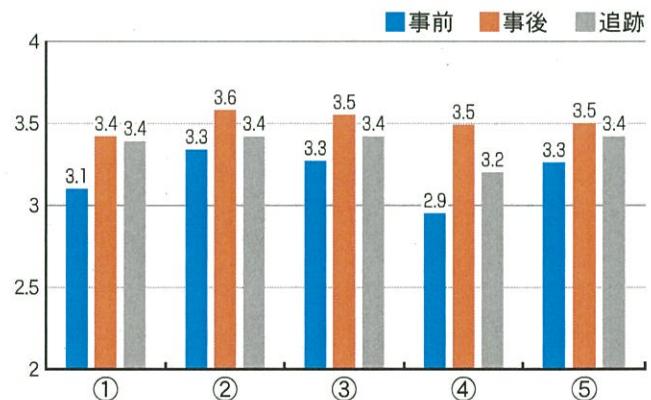
尚、本調査については、國學院大學の青木康太朗准教授に、ご指導、ご助言いただきながら行ったものである。

調査方法としては、各校の初日(事前)と最終日(事後)に調査を実施し、さらに追跡調査として、1か月後にそれぞれの学校にて、調査を行った。



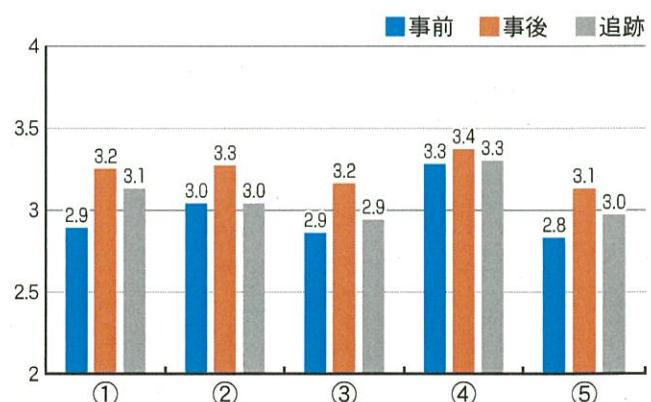
項目別：基本的な生活習慣

- ① 時間を守って行動することができる。
- ② ルールやマナーを守って行動することができる。
- ③ 身の回りの整理・整頓・清掃ができる。
- ④ 「早寝・早起き」ができる。
- ⑤ バランスの良い食事をとることができる。



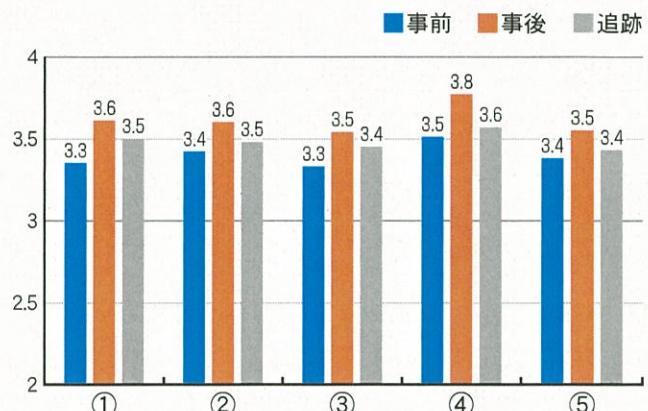
項目別：自己肯定感

- ① 今の自分に満足している。
- ② 自分には良いところがある。
- ③ 自分は誰かの役に立っている。
- ④ 自分のことを大切に思っている。
- ⑤ 自分の考えを、自信をもって伝えている。



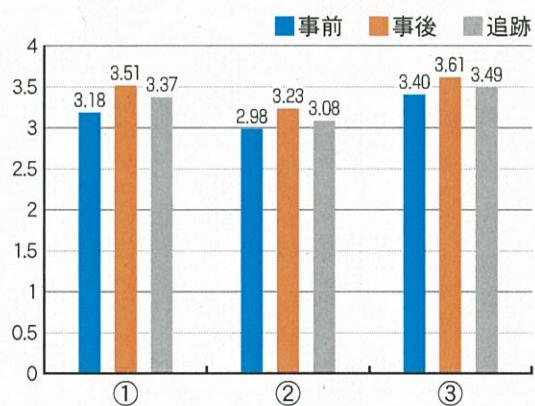
項目別：仲間とのコミュニケーション・絆

- ①自分からはっきりと挨拶や返事をすることができる。
- ②友達と励ましあいながら活動することができる。
- ③友達のこれまでとは違った姿を認めることができる。
- ④楽しく、友達や先生などと話をすることができる。
- ⑤わからないこと、できないことなど、他の人を頼ることができる。



カテゴリー別

- ①基本的な生活習慣
- ②自己肯定感
- ③仲間とのコミュニケーション・絆



分析についても、青木准教授に以下のようにしていただいた。

1. セカンドスクールの教育効果について

セカンドスクールの教育効果を検証するため、「基本的な生活習慣」「自己肯定感」「仲間とのコミュニケーション・絆」の得点の平均(M)と標準偏差(SD)を算出し、対応のある t 検定を行った。

その結果(表 1)、「基本的な生活習慣」、「自己肯定感」、「仲間とのコミュニケーション・絆」の得点は事前から事後にかけて有意な向上が認められ、いずれも中程度の効果量が認められた。このことから、セカンドスクールは、参加した児童の「基本的な生活習慣」「自己肯定感」「仲間とのコミュニケーション・絆」を向上させる効果があることが分かった。

表1. セカンドスクールの教育効果の検証(t 検定)

変数	N	(a)事前		(b)事後		(c)追跡		一要因分散分析		多重比較
		M	SD	M	SD	M	SD	F	η^2	
基本的な生活習慣	157	3.15	0.56	3.52	0.52	3.37	0.47	54.52 ***	0.26	a<b, a<c, c<b
自己肯定感	157	2.94	0.73	3.24	0.72	3.08	0.67	25.96 ***	0.14	a<b, a<c, c<b
仲間とのコミュニケーション・絆	157	3.37	0.61	3.61	0.50	3.49	0.59	20.82 ***	0.12	a<b, a<c, c<b

2. セカンドスクールの教育効果の持続について

セカンドスクールに参加した学校のうち、4泊5日のセカンドスクールに参加した学校については一ヶ月後に追跡調査を行った。そこで、効果の持続性を検証するため、測定時期(事前、事後、一ヶ月後)を要因とした一要因分散分析を行った。

その結果(表2)、いずれの変数でも有意差が認められ、「基本的な生活習慣」「自己肯定感」では大きな効果量、「仲間とのコミュニケーション・絆」では中程度の効果量が認められた。そこで、後の分析として、測定時期の多重比較(bonferroni)を行ったところ、すべての変数で事前と事後、事前と一ヶ月後の間に有意な得点の向上が認められた。

以上のことから、4泊5日のセカンドスクールに参加した児童は、セカンドスクールでの体験を通じて「基本的な生活習慣」「自己肯定感」「仲間とのコミュニケーション・絆」が向上し、その向上効果は一ヶ月後まで持続していることが明らかになった。

表2. セカンドスクールの教育効果の持続の検証(一要因分散分析)

変数	N	(a)事前		(b)事後		t検定		効果量 cohen's d
		M	SD	M	SD	t		
基本的な生活習慣	236	3.18	0.54	3.51	0.49	-11.04 ***		0.46
自己肯定感	236	2.98	0.71	3.23	0.71	-8.41 ***		0.46
仲間とのコミュニケーション・絆	236	3.40	0.56	3.61	0.47	-7.90 ***		0.42

3. セカンドスクールの期間による教育効果の違いについて

セカンドスクールの期間による教育効果の違いを検証するため、4泊5日の学校と3泊4日以下の学校に分類し、測定時期(事前・事後)と泊数(4泊5日・3泊4日以下)を要因とした二要因分散分析を行った。

その結果(表3)、測定時期の単純主効果ではすべての変数で有意差が認められたが、泊数の単純主効果には有意差が認められなかった。交互作用をみると「基本的な生活習慣」「自己肯定感」に有意差が認められたことから、後の分析として測定時期の多重比較(bonferroni)を行った。その結果、「基本的な生活習慣」「自己肯定感」とともに、どちらの学校にも事前と事後で有意な得点の向上が認められたが、それぞれの効果量を比較すると、いずれも4泊5日の学校のほうが効果量が大きいことが分かった。

以上のことから、セカンドスクールの期間にかかわらず教育効果はあるものの、3泊4日以下の学校に比べると、4泊5日の学校のほうが教育効果が高いことが示唆された。

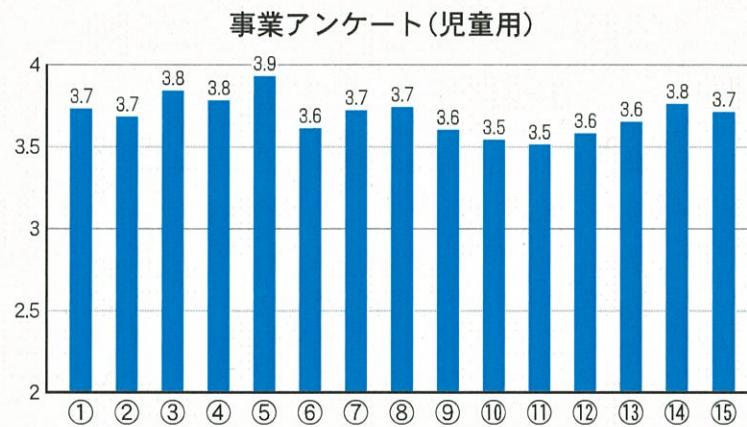
表3. セカンドスクールの期間による教育効果の違いの検証(二要因分散分析)

変数	泊数	N	(a)事前		(b)事後		二要因分散分析						単純主効果(測定時期)	
			M	SD	M	SD	測定時期		泊数		交互作用		多重比較 bonferroni	効果量 η^2
							F	η^2	F	η^2	F	η^2		
基本的な生活習慣	4泊5日	157	3.15	0.56	3.52	0.52	95.30 ***	0.29	0.38	0.00	5.18 *	0.02	a<b	0.32
	3泊4日以下	79	3.26	0.50	3.49	0.45							a<b	0.08
自己肯定感	4泊5日	157	2.94	0.73	3.24	0.72	53.06 ***	0.19	0.30	0.00	4.70 *	0.02	a<b	0.22
	3泊4日以下	79	3.06	0.65	3.22	0.68							a<b	0.04
仲間とのコミュニケーション・絆	4泊5日	157	3.37	0.61	3.61	0.50	48.15 ***	0.17	0.49	0.00	2.69	0.01	-	-
	3泊4日以下	79	3.46	0.44	3.61	0.40							-	-

【事業評価】

2つ目は、各校の事業最終日に主に、スクールタイムの体験活動についての評価アンケート調査を行った。こちらも4件法で回答させた。

- ① 事業全体の満足度を教えてください。
- ② スクールタイムの活動はどうでしたか。
- ③ なすかしの森タイムの活動はどうでしたか。
- ④ なすかしの職員の対応はどうでしたか。
- ⑤ 教育支援スタッフの対応はどうでしたか。
- ⑥ 心躍る価値があることに気づくことができましたか。
- ⑦ 体験的な学習が多かったですが、普段と比べて主体的に学習に取り組むことができましたか。
- ⑧ 体験的な学習が多かったですが、普段と比べて友達や先生、自然などとたくさん対話できましたか。
- ⑨ 体験的な学習が多かったですが、普段と比べて、今まで学んだことを生かして学習できましたか。
- ⑩ 体験的な学習が多かったですが、普段と比べて、自分の考えを深めることができましたか。
- ⑪ 体験的な学習が多かったですが、普段と比べて、課題を見つけたり、解決したりできましたか。
- ⑫ 「流れる水のはたらき」の学習について、講師の先生の話などは分かりやすかったです。
- ⑬ 「流れる水のはたらき」の学習について、流れる水の働きについて考え、理解することができましたか。
- ⑭ 「私たちの生活と森林」の学習について、講師の先生の話などは分かりやすかったです。
- ⑮ 「私たちの生活と森林」の学習について、森林の働きについて考え、理解することができましたか。



- 事業についての満足度は高く、様々な学びにつながっていると考えられる。
- 多くの児童が、なすかしの森タイムでの活動に対して、主体的に取り組んでいたことがうかがえる。
- 振り返りによって、かつどの価値づけができるなど、意識の向上を見取ることができた。
- あこがれ感を抱くなど、教育支援スタッフとの関係が、児童の成長を促進していたと考えられる。
- 体験的な学習が「主体的・対話的で深い学び」となる授業改善に効果的であることが分かった。
- 今回、強力に提案した「流れる水のはたらき」及び「私たちの生活と森林」については、効果的な学習であったことが分かった。
- 集中的にまとまりのある学習を行うことで、森林や水などの自然に関して、考えを深めた児童が多かった。





児童による一言感想



スクールタイムについて

- とても楽しくて、時間があっという間に感じた。
- いつもとは違う環境だったので学びを深められた。
- いつもと違う教室で少し落ち着かなかった。
- みんな真剣に授業を受けていた。
- 水のすごさ、木のすごさを感じた。
- 自然によっていろいろな人々が支えられていることが分かった。
- 自然の森の学習でいろいろと学んだことを生かそうと思った。
- 自然に触れてみて耳を澄ましたら静かに木が揺れている音や落ち葉が動く音など自然を感じました。
- 流れる水の働きで、川幅が細ければ早く、広ければ遅いことが分かった。
- 体験がたくさんあり、とても楽しくて、主体的に取り組めた。水のはたらきがよく分かった。
- 理科でいろいろ学べた。教科書で勉強したことをよく生かせた。
- 自然の力はすごいと感じた。自然は楽しい。水のはたらきがよく学べた。実際に見てやって触って感じたことがたくさんあった。
- はがきを使うのは簡単だけど、はがきを作るのは大変だということ。
- いつも通り使っている紙がこんな風にできているんだなと思いました。
- 自分から質問することができた。
- 主体性が前よりも身についた。
- 自分から積極的に活動できた。
- 体験することで普通の授業よりもわかった。
- 学校とはちがう学びで、学びが深まった。
- ふりかえりでもよく書けた。課題を見つけることはあまりできなかつたが、解決することはできた。



なすかしの森タイムについて

- 前よりも感受性が豊かになったと思う。こんな楽しい5日間は絶対にない。
- もう1度したい。友達と絆を深められた。
- ゲームやテレビがなくても、楽しかった。家に帰りたくない。
- みんなと協力し合い、心を一つにして活動できた。
- 自分達だけで協力して考えて行動できたことがよかった。
- みんなで協力したほうが効率的で、時間を短縮できる。
- 時間を守ることの大切さがわかった。
- 集団行動の大切さが分かった。



- 自分の管理とプラスもっと行動を早くしないとダメなことが分かった。
- いつもやってもらっていることがあたりまえでないことがわかった。
- 親がいない生活は結構きつくて、起きるのが遅くなってしまうことが分かった。
- もっとみんなが話を聞いてくれれば、もっとたくさんのことことができたと思う。
- おふろにみんなで入ったのが楽しかった。
- ドッジボールなどが楽しかった。
- ナイトハイクが楽しかった。
- 星空がきれいだった。
- キャンプファイヤーがきれいだった。
- キャンプファイヤーが思ったよりきれいでめちゃくちゃ泣きました。
- キャンドルファイヤーが心に残った。
- キャンドルファイヤーでたくさん笑ってたくさん泣いた。
- 野菜を少し食べられるようになった。



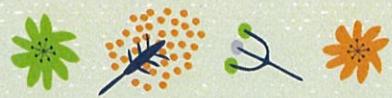
教育支援スタッフについて

- 言葉遣いなどがよく優しかった。
- 話しかけやすい雰囲気でとてもよかったです。
- スタッフの人たちみたいに優しい人たちになりたい。
- けがをしたときに先生が素早く対応してくれた。
- やさしくて、おこるときは、おこってくれてよかったです。
- 第二のお母さん的存在。
- 支援スタッフが親のような存在でした。
- 「こうしたらしいのかな」等と相談できた。
- 分からぬことをたくさん教えてくれてよかったです。
- 大学生と別れたくない、できれば学校に来てほしい。
- キャンプファイヤーで大学生たちが感じていることを話してくれたことが心に残った。
- ドッジボールで、大学生が本気でやってくれたことがうれしかった。
- お風呂の後に支援スタッフと一緒に面白い話をしたことが忘れられません。





大学生の育ち



教育支援スタッフとして、スクールタイムでは担任の補助、なすかしの森タイムでは主体的に児童への指導者としての立場で、子供たちへのかかわることが役割であった。

教員を志望する大学生も多数いたが、実際にここまで主体的かつ濃密に児童と接する機会のあったものは少ない。

その中で、施設職員が支援していたとはいえ、教育支援スタッフ同士が主体的に考え、協働的に活動することができ、様々な面での成長を感じることができた。

以下の5項目について4件法で調査

4とてもあてはまる 3ややあてはまる 2ややあてはまらない 1全くあてはまらない

- ① 支援スタッフ同士のつながりを感じられた。
- ② いつも以上に笑顔で参加できた。
- ③ 主体的に事業に参加できた。
- ④ 職員との協働を感じることができた。
- ⑤ コミュニケーション力が向上した。
- ⑥ 参加者に対して、適切な支援ができた。
- ⑦ 学校教育について理解を深めることができた。
- ⑧ 社会教育施設の事業について理解を深めることができた。
- ⑨ 自らの生き方や働き方につながる経験とすることことができた。

事業アンケート(教育支援スタッフ)

事業全体の満足度 7.9(10点満点)
回答総数 26



- 事業に対する満足度は高く、自らの成長を実感している大学生が多い。
- ただし、自分の現在の指導力等を目の当たりにして、自己評価が低い大学生もいた。
- 教育支援スタッフ同士、協働的に活躍していることを自他ともに認めることができる。
- 指導者自身の多様性があることの重要性に気付き、多様な役割が求められる中、仲間と分担して、指導に当たることの良さを実感していた。
- 普段関わることのない教員や施設職員、児童と関わる中で、自己の生き方について考えるきっかけとなった事業であるといえる。
- 「安全に失敗できる」との言葉があり、失敗を恐れず、積極的に児童への指導手法を試そうとしており、失敗を糧に成長できたことがわかる。
- 活動を机上のみで計画するのではなく、実地踏査を重ねたり、試行したりすることが、体験活動には重要なことであるということを、経験をもって感じることができた。





大学生の事後レポート(抜粋)



- 職員の方の「きっかけ」という言葉を聞いて、支援する際、様々なことを考えた。支援していくことで、児童一人一人が少しでも変わるきっかけになってほしいと思った。初めて児童と会った時から少しでも変わっていく姿や、自分の考えていたこと以上のことを成し遂げる姿が私にとっては大きな喜びであり、やりがいであった。
- 私自身普段から人に対して「怒る」ということがあまりないため、子供たちに怒ることができるのが不安な部分もあった。子供たちに注意して、聞いてくれるのか不安であったが、きちんと静かに話を聞いてくれて、その後も気を付けながら生活をするようになった。自分が目指している教師像に一瞬でもなれたのかなと感じ、成長を実感した。
- 担任の先生方の指導の様子を見る中で、介入の仕方について考えるべきであったことに気づかされた。経験値という面で子供は大人に勝つことができない、だからこそ教師は子供たちを導かねばならないのだ。何がいけなくて、何をすると良いことに繋がるのか、気付きを与えるのが教師の役目だと感じた。
- 小さなことから大きなことまで多々失敗をした。しかしながら、その度に子供の優しさや職員の方の的確なご支援、先生方からの明文化しないフォローがあったおかげで、それらの失敗を学びに変えることができた。私の理想の教師像が「子供に安全な失敗を体験させてあげられる教師」となった。何に対しても子供が安心して失敗ができる環境というものは、教育において必要不可欠であると今回の活動で学び取ることができた。
- 今まで、子供の前に立つときは、「教師であること」にこだわっていたが、教師の前に「人」として大切なことは、教育の場面でも大切なことであり、自分が持つ「人」としての軸は、教育者としての軸にもなり得るのだと気付くことができた。
- 自分たちで活動を企画する際、子供たちにとっての楽しさ、その活動をしてどんな風になってほしいか、安全面に関する配慮などを考えることが大切だと学んだ。自分たちが考えたものをすぐに実際に子供たちにやってもらう機会はなかなかないため、今回考える時間は短かったものの何度か企画をやらせていただき、将来にまでつながる経験を得たように感じる。
- これまで私は宿泊を伴う学習を学校行事の一つとして位置づけていたため、楽しく思い出に残ることが重要だと思っていた。しかし、先生方や職員の皆さんには、目標やねらいを定め、それに合う活動を計画していた。そして、子供たちの様子や状況に合わせて、計画を柔軟に変更していた。これまでそのような教育を受ける立場であったため、教師側の視点で宿泊学習を見ることができたのは貴重な経験だったと思う。
- スタッフ内でどう連携していくとか、この役はこの人が適任だから任せようとか、そういう連携の取り方もできた今回のセカンドスクールは、自分にとっても大きな糧になったと思う。
- 今回子供たちを見て、自然がどうこうというよりも、“非日常”的空間だから学べることがあったという方が正しいのではないかと感じた。“非日常”なところで学ぶことを意識したプログラムをつくっていく方が、子供に何か新しい考え方を手に入れるきっかけをつくれると思う。自分の育っている身の周りの環境しか知らないことをそのままにしている方が子供にとってもったいないことなのだと思う。いつもと違うことをすることができる環境づくりと、その価値を上手に世の中に伝えていくスキルの向上を目指すことが、今の自分のすべきことだと感じた。
- 「教育とはなんだろうか?」「私は本当に教員になりたいのだろうか?」という疑問について、考える良い機会となった。
- 私が小学生の時にこのセカンドスクールというものがなかったのが悔しいぐらい、児童にとっても支援スタッフにとっても、良い体験活動ができる場だと感じた。



保護者の育ち

以下の5項目について4件法で調査

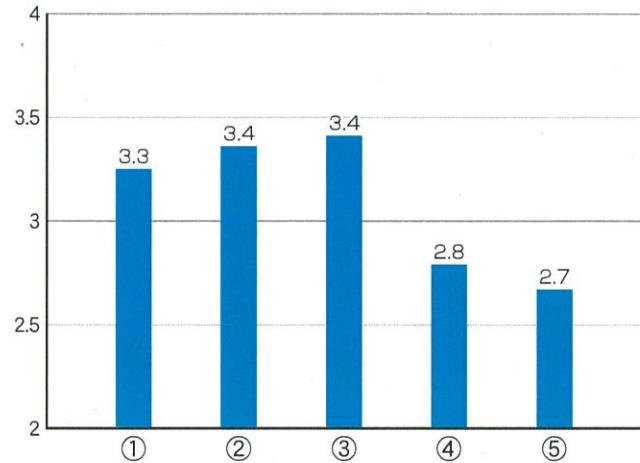
4とてもあてはまる 3ややあてはまる 2ややあてはまらない 1全くあてはまらない

- ①セカンドスクールが、子育てを振り返る機会となった。
- ②セカンドスクールが、期待通りのものであった。
- ③セカンドスクール中、お子様について会話をしたり、普段以上に考えを巡らせたりした。
- ④セカンドスクール前後で、親子の会話の内容に変化があった。
- ⑤セカンドスクール後のお子様の生活に変化を感じた。

事業アンケート(保護者)

事業全体の満足度 8.5(10点満点)

回答総数 235



- 事業に対する満足度は非常に高く、わが子の成長を感じている保護者が多い。
- わが子の成長を感じること自体が、保護者の育ちであるとも言える。
- セカンドスクール中に家族でわが子のことを考えたり、子育てを振り返ったりした保護者が多く、愛情を再認識するきっかけとなったと考えられる。
- 家族の中でのわが子の存在の大きさを実感し、親離れ子離れに向けての第1歩となったと考えられる。



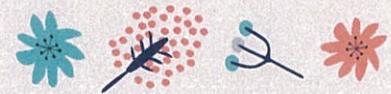
保護者からの感想

- 今まで親子で離れたことがなかったので、親としてもとてもよい経験となった。少し前まで、母と離れられず泣いていた子が、セカンドスクールで更にたくましく成長した。もともと口数は多くないのだが、セカンドスクールでのことを話す時の表情やお友達との関わり方、家の手伝いをする姿を見ていると、とても成長したなと感じる。
- 一人子供がないだけでなんだかひっそりと静かになった我が家。大人も成長させられる時間になった。
- 子供の口から「ママのありがたみが分かった」と言われた。何でも自分でやらなければいけなかつたことがすごく勉強になったのだと思う。
- 家では、ほんどの日が、テレビやゲームのメディアばかりで自由時間を過ごしてきたが、このセカンドスクールの数日間のノーメディアがよい刺激になった。
- セカンドスクール前後では、特に変化は感じられない。しかし、家族以外の大人と接し、友達との共同生活で学んだことを活かしてくれたらいいなと思う。
- もともと会話の多い家なので改めて変わったことはない。





教員の育ち



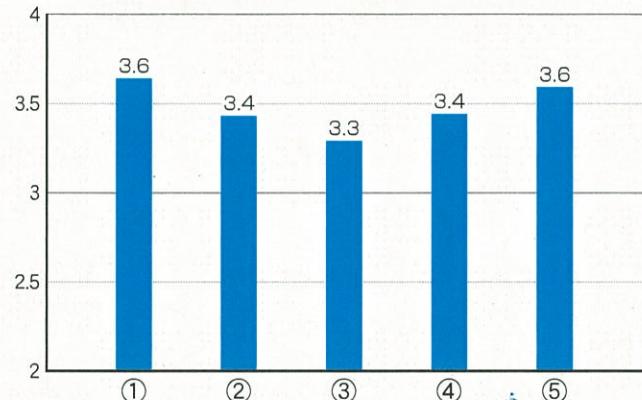
以下の5項目について4件法で調査

4とてもあてはまる 3ややあてはまる 2ややあてはまらない 1全くあてはまらない

- ①セカンドスクールを通して、児童の成長を感じることができた。
- ②普段以上に、カリキュラムマネジメントの視点をもって取り組むことができた。
- ③普段以上に、「主体的・対話的で深い学び」のある授業が展開できた。
- ④教師力向上につなげることができた。
- ⑤教育支援スタッフを効果的に活用できた。

事業アンケート(教職員)

事業全体の満足度 9.0(10点満点)
回答総数 28



- 事業に対する満足度は、非常に高く、自己の成長を感じている教員が多い。
- 教育支援スタッフを効果的に活用でき、協働的に教育活動を進めることができた。
- 教科学習を施設の教育環境・教育資源を活用して行うことができ、指導力の向上につながった。
- 効果的な単元構成を考えたり、学習のつながり、まとまりを考えたりしながら授業づくりができたことで、カリキュラムマネジメントの視点を獲得することができた。
- 主体的に授業づくりをすることの必要性を身に着けることができた。



教員からの感想



- なすかしだからこそ、4泊5日だからこそできることは何だろうと考えながら、自分にできることについて取り組んだ。
- 施設職員のご協力により、学校のほうで考えた日程時間割が大変充実した形で実施でき、4日目の夜のキャンプファイヤーで涙しながら本音を語ったり、友達に寄り添ったりする子供たちの姿が印象的だった。
- 児童たちは事前準備から主体的に取り組み、達成感を感じられたようである。私自身も様々な経験をしたり、計画したりする中で大変勉強になった。
- 施設を利用することにより、活動のねらいを把握・意識しやすい。
- 教師の中に引き継ぎ、任せる・任されることから責任という意識がとても高まったのではないか。
- 細案をもっと頭に入れて当日を迎えるべきだった。宿泊についての事前指導などをもう少し丁寧に取り組むべきだったと反省している。
- 事前指導から目的意識を持たせる指導を行いたい。



施設職員の育ち

施設職員の育ちについては、以下のように事業の成果として整理した。

また、併せて、今後の課題も整理した。

【成 果】

- 当施設の体験活動プログラムを教科等に関連付けられるような展開を提案できた。
- 単元構成など、カリキュラムマネジメントの視点を獲得できた。
- 研修指導員の研修を通して、効果的な活用方法について考えることができた。
- 「教科等に関連付けた体験活動プログラム」の事例を増やすことができた。
- 教員や研修指導員への支援、教育支援スタッフへの助言など、間接的な指導方法を身に付けることができた。
- 体験的な教科学習が「主体的・対話的で深い学び」のある授業展開になることが分かった。
- 事業運営に関するマネジメント力が向上した。



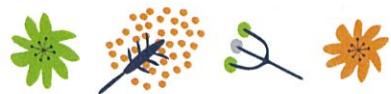
【課 題】

- 指導者への支援について、さらに効果的な在り方を模索していく必要がある。
- 学校と密接にかかわる事業だが、企画指導専門職だけでなく、事業推進室全体で取り組む必要がある。
- 参加校それぞれの実態等に合わせたプログラムの違いはあるが、施設職員の情報共有を密にし、担当者による差が生じないようにしていく必要がある。





今後の展望



セカンドスクールは、平成19年度から始まり、平成23年度より当施設の看板事業として14年間実施してきた。令和3年度からは、国立青少年教育振興機構の第4期中期目標期間の始まりにあたり、「看板事業」としての役割を終え、本事業の在り方を発展的に検討する時期であると考える。

以下に、次年度以降の取組の可能性を示唆しておく。

- 「長期集団宿泊体験」及び「教科等に関連付けた体験活動プログラム」の基本的な方針は継承。
- 参加学校との役割や責任の明確化を図るため、教育委員会との共催を検討。
- 参加校の教員研修機会の提供。



「長期集団宿泊体験」について

- 1週間程度の宿泊体験を実施。
- 大学生の教育支援スタッフの確保と育成。
▶法人ボランティアとして養成した大学生から
教育支援スタッフを募るとともに、大学と授業連携により、より多くのスタッフを確保する。
- 教育支援スタッフが児童と共に活動する時間を、ゆとりをもって確保できるようプログラムの調整を行う。
⇒施設を利用する学校や社会教育団体にも、長期集団宿泊体験の成果を伝えていく。

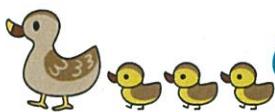
「教科等に関連付けた体験活動プログラム」について

- スクールタイムにおいて、学校主体で教科学習を実施できる支援方法の確立。
- 研修支援事業に位置付けつつ、活動内容やねらいによっては、施設職員が直接指導するプログラムを提案していく。
- 施設から「教科等に関連付けた体験活動プログラム」を提案し、実践事例を増やしていく。
- 防災・減災について学ぶ体験活動プログラムも実施できるよう検討していく。
⇒施設を利用する学校団体が、活用できる体験活動やプログラムを作成していく。

「五者の育ち」について

- 五者の育ちに関しては、児童のみならず、保護者、教員の意識変化を数値化することができた。今後は、施設職員の育ちについても数値化できるように検討する。
- 五者相互の関わりについては、例えばセカンドスクール終了後の保護者や教員による児童への声かけや接し方などについて、提案できるようにする。





セカンドスクールの歴史



平成20年度(1校 19名)

西郷村立 羽太小学校 6年生19名 教育支援スタッフ3名

「学習力と生活力を高めるために」をテーマとする。

教職員の負担軽減を考慮しながら、長期集団宿泊学習を実施。教育支援スタッフとして、大学生の活用。

自然の家の教育環境・教育資源を活用しての教科学習を展開。試験的事業開始

平成20年度(2校 39名)

西郷村立 羽太小学校 6年生10名 教育支援スタッフ5名

西郷村立 米小学校 5年生24名 教育支援スタッフ5名

保護者からも高評価を得たため、2校に広げる。

「授業時数の確保と学力の保証」の課題対策のため、体験的な教科学習の展開を強化。

プログラム開発のための事業運営委員会を立ち上げ、江戸川区の小学校も招聘。

平成21年度(2校 44名)※教育支援スタッフの人数は不明

西郷村立 羽太小学校 6年生15名

西郷村立 米小学校 5年生29名

今後、23年度までに西郷村全5校での実施を約束。



平成22年度(4校139名)

西郷村立 羽太小学校 6年生15名

西郷村立 米小学校 5年生26名

西郷村立 小田倉小学校 5年生87名

西郷村立 川谷小学校 5年生11名

教育支援スタッフ延べ20名

平成23年度(5校218名)

西郷村立 羽太小学校 6年生18名 教育支援スタッフ3名

西郷村立 米小学校 5年生30名 教育支援スタッフ3名

西郷村立 小田倉小学校 5年生85名 教育支援スタッフ10名

西郷村立 川谷小学校 5年生6名 教育支援スタッフ2名

西郷村立 熊倉小学校 5年生79名 教育支援スタッフ9名

西郷村全5校での実施。

3つのC(Chance Change Challenge)をテーマとする。

IKRでの調査を開始。

この年から、第2期中期計画が始まり、看板授業となる。

平成24年度(5校207名)

西郷村立 羽太小学校 6年生15名 教育支援スタッフ3名

西郷村立 米小学校 5年生28名 教育支援スタッフ6名

西郷村立 小田倉小学校 5年生77名 教育支援スタッフ13名

西郷村立 川谷小学校 5年生10名 教育支援スタッフ3名

西郷村立 熊倉小学校 5年生77名 教育支援スタッフ10名

実施後に、全校の校長、担当教諭、教育委員関係者を集めて、評議会を実施。

教育支援スタッフを確保することから、育成することへの意識転換。



平成25年度(6校266名)

西郷村立 羽太小学校 6年生14名 教育支援スタッフ3名

西郷村立 羽太小学校 5年生20名 教育支援スタッフ3名

西郷村立 米小学校 5年生27名 教育支援スタッフ3名

西郷村立 小田倉小学校 5年生77名 教育支援スタッフ8名

西郷村立 川谷小学校 5年生8名 教育支援スタッフ2名

西郷村立 熊倉小学校 5年生73名 教育支援スタッフ9名

白河市立 表郷小学校 5年生47名 教育支援スタッフ6名

羽太小5年生が参加することで、西郷村の全5年生が参加する事業となる。

白河市にも参加校を広げる。

平成26年度(6校255名)

西郷村立 羽太小学校 5年生15名 教育支援スタッフ3名

西郷村立 米小学校 5年生37名 教育支援スタッフ4名

西郷村立 小田倉小学校 5年生70名 教育支援スタッフ9名

西郷村立 川谷小学校 5年生6名 教育支援スタッフ3名

西郷村立 熊倉小学校 5年生56名 教育支援スタッフ5名

白河市立 表郷小学校 5年生71名 教育支援スタッフ8名



平成27年度(10校325名)

西郷村立 羽太小学校	5年生 15名	教育支援スタッフ3名
西郷村立 米 小学校	5年生 24名	教育支援スタッフ4名
西郷村立 小田倉小学校	5年生 79名	教育支援スタッフ13名
西郷村立 川谷小学校	5年生 10名	教育支援スタッフ3名
西郷村立 熊倉小学校	5年生 72名	教育支援スタッフ12名
白河市立 表郷小学校	5年生 54名	教育支援スタッフ8名
棚倉町立 社川小学校	5年生 26名	教育支援スタッフ4名
棚倉町立 高野小学校	5年生 18名	教育支援スタッフ4名
棚倉町立 近津小学校・山岡小合同	5年生 27名	教育支援スタッフ5名

棚倉町にも参加校を広げる。

平成28年度(11校386名)

西郷村立 羽太小学校	5年生 11名	教育支援スタッフ3名
西郷村立 米 小学校	5年生 23名	教育支援スタッフ3名
西郷村立 小田倉小学校	5年生 80名	教育支援スタッフ8名
西郷村立 川谷小学校	5年生 5名	教育支援スタッフ2名
西郷村立 熊倉小学校	5年生 49名	教育支援スタッフ4名
白河市立 表郷小学校	5年生 63名	教育支援スタッフ6名
棚倉町立 社川小学校	5年生 34名	教育支援スタッフ3名
棚倉町立 高野小学校	5年生 16名	教育支援スタッフ3名
棚倉町立 近津小学校・山岡小合同	5年生 31名	教育支援スタッフ3名
棚倉町立 棚倉小学校	5年生 74名	教育支援スタッフ7名

棚倉町全5校が参加。全11校となり、最大規模の参加者数となる。



平成29年度(11校351名)

西郷村立 羽太小学校	5年生 8名	教育支援スタッフ3名
西郷村立 米 小学校	5年生 41名	教育支援スタッフ5名
西郷村立 小田倉小学校	5年生 69名	教育支援スタッフ9名
西郷村立 川谷小学校	4・5年生 5名	教育支援スタッフ2名
西郷村立 熊倉小学校	5年生 58名	教育支援スタッフ5名
白河市立 表郷小学校	5年生 57名	教育支援スタッフ6名
棚倉町立 社川小学校	5年生 18名	教育支援スタッフ3名
棚倉町立 高野小学校	5年生 10名	教育支援スタッフ3名
棚倉町立 近津小学校・山岡小合同	5年生 27名	教育支援スタッフ3名
棚倉町立 棚倉小学校	5年生 58名	教育支援スタッフ6名

川谷小は4・5年生合同実施。

コンセプトとして「五者の育ちの場」を新設。

平成30年度(8校293名)

西郷村立 羽太小学校	5年生 12名	教育支援スタッフ2名
西郷村立 米 小学校	5年生 35名	教育支援スタッフ6名
西郷村立 小田倉小学校	5年生 71名	教育支援スタッフ6名
西郷村立 熊倉小学校	5年生 61名	教育支援スタッフ5名
白河市立 表郷小学校	5年生 59名	教育支援スタッフ6名
棚倉町立 社川小学校	5年生 20名	教育支援スタッフ3名
棚倉町立 高野小学校	5年生 11名	教育支援スタッフ3名
棚倉町立 近津小学校	5年生 24名	教育支援スタッフ3名

川谷小・山岡小は、児童数減のため、棚倉小は学校行事のために参加せず。

独自の調査項目を作成し、児童の変容をとらえる。

教科等に関連付けた体験活動プログラムの実施をコンセプトとして明確化する。

令和元年度(9校294名)

西郷村立 羽太小学校	5年生 9名	教育支援スタッフ2名
西郷村立 米 小学校	5年生 39名	教育支援スタッフ3名
西郷村立 小田倉小学校	5年生 66名	教育支援スタッフ4名
西郷村立 川谷小学校	5年生 5名	教育支援スタッフ1名
西郷村立 熊倉小学校	5年生 63名	教育支援スタッフ5名
白河市立 表郷小学校	5年生 47名	教育支援スタッフ3名
棚倉町立 社川小学校	5年生 28名	教育支援スタッフ2名
棚倉町立 高野小学校	5年生 14名	教育支援スタッフ2名
棚倉町立 近津小学校	5年生 23名	教育支援スタッフ3名

川谷小は実施。山岡小・棚倉小は今後の参加を辞退

